

## 序 章

本学の前身の松蔭女学校は、1876年にイギリスから神戸にやってきた SPG (Society for the Propagation of the Gospel) の宣教師ヒュー・ジェイムズ・フォス、および、少し後の 1888 年に来日した女性宣教師ハナ・マリア・バーケンヘッドの協力によって、1892年に神戸の北野町に誕生した。初代校長はバーケンヘッド、創設当初は 11 名という小さな規模の学校であった。

「松蔭」という名前の由来について、フォスは、学校の設立に協力した、イギリスの「キリスト教婦人会」への手紙の中で、「松は日本独特の樹木であり、自国の松の木の蔭で乙女たちが、しとやかさと上品さを持って生活しているという姿が、この名前を通して私たちが日本人に伝えたいと思った理念の一つなのです。」と述べている。

フォスのこの言明が象徴するように、松蔭女学校は、西欧で育ってきたキリスト教を教育の基礎としながら、キリスト教をそのままの形で日本に伝えるのではなく、松に象徴されるような伝統的な日本文化を尊重した上で、その普遍的な精神を日本の若い女性に伝えようとしたのである。

当初設定された授業科目は英語と裁縫であった。フォスらの母語である英語は、キリスト教の精神、および、外国の新しい文化を取り入れるための媒体であるとともに、女性が精神的に自立することを助けるための道具としても活用できるように、必須の教養科目という位置付けであった。

一方、裁縫は、創立当初の明治時代においては、家庭内外で役立てるための実用的な技能であり、英語に象徴される教養を補完する実用的な技能を合わせもつ女子の育成を目指していたのである。このことは、裁縫が洋裁ではなく和裁であったことにも象徴されている。あくまでも伝統的な日本文化を尊重するという、日本の女子教育に対する創立者たちの見解を見ることができる。

このような、教養と実用の 2 本立てを志向し、同時に外国文化と日本文化の融合を目指すという多面的な伝統は、1950年に発足した「松蔭短期大学」（後の「神戸松蔭女子学院短期大学」、「神戸松蔭女子学院大学短期大学部」）を経て、1966年に創立された「松蔭女子学院大学」（現在の「神戸松蔭女子学院大学」）にも受け継がれてきている。

創立当初の「英語」の流れを汲む、ことばを中心とした和洋の文化に対する教養主義的な教育方針は、大学の英語学科、日本語日本文化学科、総合文芸学科の 3 学科からなる文学部において、引き続き発展してきている。

一方、「裁縫」の伝統は、短期大学部生活科学科、生活造形学科を経て、人間科学部の生活学科とファッション・ハウジングデザイン学科に引き継がれている。人間科学部では、実用主義的な考え方に重点を置き、多方面の専門的職業人を社会に送り出すことを目標の 1 つとしている。人間科学部には他に、心理学科と子ども発達学科を設置しており、人間のこころの分析、育成に関わる人材を養成している。

文学部と人間科学部に共通する本学の教育の根底には、フォスによってもたらされた、キリスト教の精神に基づく教育理念がある。本学の教育に通底するのは、キリスト教の愛の精神を通して、生きることに確かな意味づけを与えることである。若い世代に愛の精神を教えることは、キリスト教系の大学として、重要な使命である。さらに、一般的な教養

や個別の専門技術の取得に偏ることなく、全学共通科目を基礎として、社会人としての基礎力を養成することも重要な教育目標の一つとしている。

女子教育は、卒業後に積極的な意味をもつ。女子だけの環境の中で、自主的に行動することによって培ったリーダーシップと、それを支える、責任感を伴ったフォロワーシップの経験によって、性別でなく、一人一人の能力・個性に従って役割が決まるという経験をもつことができる。それを社会の中で生かすことが望まれる。

神戸は、山と海の両面的な自然に恵まれ、外来の文化を積極的に取り入れ、多様性の中で発展してきた都市である。このような多様性をもつ都市で一定の期間を過ごした学生は、卒業後に、どこの土地に住んでも、多角的な視点をもつ人間として生きていくことができる。

また、グローバル化の重要性が強調される今日において、英語と並んで、キリスト教主義による教育を受けたことが、世界に出ていくための普遍的な道具となり得る。本学で学ぶということが、日本をよく理解した上で、世界的な視野を身に付けるということに役立つことを望んでいる。

今回の自己点検・自己評価にあたっては、自己点検・評価運営委員会が中心となってまとめたが、その際の基本的な姿勢としては、委員会構成員のみで執筆するのではなく、できるだけ多くの教職員が点検・評価の作業に参加することによって、本学の現状についての正しい認識を共有することを目的とした。本学のように120年を超える歴史をもつ大学では、世代を越えた教職員間で共有すべき情報が必ずしも一致していない可能性もあったが、今回の作業によって、本学の歴史と現状に関する認識を全学的に共有することができた。